

観音物語 (20) 見てござる

しんかんしょうじょうかん こうだい ち え かん ひ かんぎゅう じ かん じょうがんじょうせんごう
真観清浄観 広大智慧観 悲観及慈観 常願常譚迎

真観と清浄観 広大なる智慧観 悲観及び慈観 常に願ひ常に譚迎すべし

ちょろりとごまかすことを「ちょろまかせ」という。人目につかない小さな盗みだからバレることはあまりない。ちょろまかせはさりげなくできて、勇気や緊張もいらぬ。罪の意識も薄い。ちょろまかせができるチャンスがあるのにちょろまかせをしないと、むしろ損をしたような気分になる。それがちょろまかせである。

ちょろりと横を見て、ちょろりとつまみ食い。ちょろりと後ろを向いて、ちょろりとポケットに。ちょろりとお尻をさわって、ちょろりといい気分。ちょろりと尻をして、ちょろりと満足。ちょろりと、ちょろりと、あちこちにちょろりがいっぱいいる。

金龍寺の大観音は眼が青い。青い眼は冷静さを感じさせる。観音さまに手を合わせていると、ちょろまかせが思い出されてくる。青い眼がちょろまかせを見透かしているのだ。大観音の前をちょろりと手を合わせて通過するわけにはいかない。きちっと正面に立ち止まって礼拝させられてしまう。

大観音はなぜ私の足を止めてしまうだろうか？

それは、観音さまには、「真実の眼」と「清らかな心」と「広い智慧」と「慈愛」そして「悲哀」の眼差しでご覧になっておられるからである。観音経の終わりの部分にこの五つの誓いがはっきりと示されている。

「真実の眼」とは、ごまかしのない正しい洞察力である。

「清らかな心」とは、汚れた心を洗ってしまう作用である。

「広い智慧」とは、苦しみや悩みの原因に光を照らす解決方法である。

「慈愛」とは、愛情にあふれる情熱である。

「悲哀」とは、つらいことに寄り添う安心である。

金龍寺の十一面観音さまは、この五つの徳を左手に持った軍持（水壺）と蓮華に託しておられる。そして、右腕に数珠を掛け、錫杖をしっかり握って世間を視察しておられる。ご真言「オンマカキャロニキャソワカ」の「マカキャロニキャ」とは、「大悲」という意味。つまり、私たちの悲しみを深く洞察なされているのだ。しかも、八メートルの高さから、四方八方に市民を観察しておられる。

金龍寺では、観音さまの前でゆっくり坐ったり、大観音の周囲を歩いたり、大きな足をさすったりする祈りの場が作られている。ちょろまかせの拝み方をしていても、大悲の眼力に注がれ、真剣になってくる。尊顔はやや下向きであるから、観音さまの眼差しに全身がすっぽりと包まれてしまう。ましてや、観音さまの眼を仰げば悪心がたちまちに照らされ、反省の念が湧いてくる。

小さなちょろまかせも、邪心も、妄想も、悲しさも、心配も、優しさも、思いやりも、愛情も、観音さまは私のすべてを見てござる。